









# 第一世諸君へ

第  
指  
夫

處が更に「屢々其の多いは」のもので、或ひ「一體あれは猶人か、間」の如き、徳、愛徳、没徳の賭博場が支那へいたら彼曰く云ふ。日本人に依つて加州の方の骨董、どうせ其の金なら同脇の手に落して貰ひ度い」と

ふさうである。「同脇が儲けた金を支那人に巻き上げられるのは馬鹿、彼は又で經營されてゐる事だ、彼等は云ふ。支那人の賭博場に入れる見守つて置いた△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△

△





## 修羅八荒

(世二)

行友 李風作

### 愛戀の渦(五)

「ア、だれか人が？」  
小糸が、ささやく聞き耳を立てて、今まだびびりの聲だ。鏡いのそ間に、つてたお後室様の聲だ。鏡いのそ間に、つてたお後室様の聲だ。  
けはいの聲が流れます、しかしぞれも東の間だ。

時に恵の助は、ハツミして常の

自分の心持に古ちぬみを以て

迎へるほきの、ゆきりと寛ろきこ

に蘇生つた。

「デハお後室、この、査を頃ま

すばり、お下物として是非つけ

まはりいは……」

「またでござりますか、仕機あ

りませんね」

懲らしく、眉をひそめて氣を

持たせ

「妻が京の假宅で、泥棒にすり

替へられた小判の御詫儀、イエそ

の事を聞きたいと仰しやるのこ

とござませう

如何にも仰仰の通り、その江戸表

から御持参された四百両の小判

數へは、出入の用達町人から納め

ましたので

「その御用町人、申すは？」

やうな、お覺えの廉はございま

すまいから

「如何にも仰仰の通り、その江戸表

から御持参された四百両の小判

數へは、出入の用達町人から納め

ましたので

「なるほど、山形の御印を」

當時江戸での御金御印は、後藤

をはじめ、三谷、中井、原田、大

身をしては左もあるべき次第に

用達からの納金があれば、なほ以

て一々刻印のあるはずを存じます

が……」

「それはあの、山形の印が打込

んでございました」

「その御用町人、申すは？」

用達からの納金があれば、なほ以

て一々刻印のあるはずを存じます

が……」

當時江戸での御金御印は、後藤

をはじめ、三谷、中井、原田、大

身をしては左もあるべき次第に

用達からの納金があれば、なほ以

て一々刻印のあるはずを存じます

が……」

當時江